

(五) 白田・腰の神さま

湯ヶ岡の高羽家の庭先には、多くの石の塔があり、これらは大洞庵石塔群と呼ばれ、町の文化財に指定されています。この石塔群は、いつ、だれが、何のために建てたのかはわかっていませんが、次のようなお話が伝わっています。

昔、お百姓さんが「まさなおし」といわれる田んぼを作りかえる仕事をしていると、土の中からたくさん骨が出てきました。このあたりは、狩りですったイノシシやシカの骨を埋めたところなので、その骨だと思って石ころなどといっしょに道に敷いていました。ところが、しばらくすると、お百姓さんは急に腰が痛くなってきました。やっとの思いで家に帰ったのですが、腰の痛みはさらにひどくなるばかりです。布団に横になってどうして腰がいたくなったのか考えてみると、はっと思いました。「今日、イノシシやシカの骨

だと思って道に敷いた骨は、もしかしたら人の骨かもしれない。これはたいへんなことをしてしまった。」

もう日は沈み、あたりはすっかり暗くなっていました。しかし、お百姓さんは腰の痛みをこらえ、おばあさんの肩につかまりながら、骨を敷いたところまでいきました。そして、灯をたよりに骨を拾い集め、もとのところにおさめました。すると、あんなに痛かった腰の痛みがすっかり消えてなくなったのです。

この骨は戦いに負けて亡くなったお侍の骨かも知れないと思ったお百姓さんは、そこにお墓を建ててこの骨をおさめ、ていねいに供養をしました。それからこの話は村中に広まり、村人からは「腰の神さま」として祀られるようになったそうです。